里見八犬傳

第六編

卷卅九

へ13
709
90

明治三十六年十月九日購求

帝國圖書館藏

帝國圖書館 131 門 連 號 709 卷 90

南總里見八犬傳第九輯巻之三十九

東都　曲亭主人編次

第百六十五回下

その題目に既に前巻に出づ。所云野猪を放ちて信乃戰車を焼く。即是なり。

今一回を釐て二巻に做さと。其例今一とへども。本傳は一百七十回にて圓圓さらまく欲する故に是より下は回毎に長編ならざるとなり。

却説犬飼現八は則三千個の隊の兵を馬の前後に従せて。五十四田を投ぐいそぐ程に。それが前面に屯せる四五千の軍兵あり。敵狩方欲とだるに近つく隨に又よく見れば。是則別人ならず。犬塚信乃戌孝が。杉倉直元等と共侶に。その現八を待えけり。鄙に現八は還りて。一千有餘の隊の兵も皆來てその隊の中に在りしかども。開ぎ小頭人老兵衛と。俱に犬飼を相迎へて。信乃が用意を告

ゐども現八是をうち听り躍く馬より下立く隨即信乃ゐ對面を當下信乃がゐゑ鄙ゐ我寄隊の戰車を數る破り且一方を殺而て杉倉田稅を極ひ切れども和殿の安危心ゐ懸れが遠く去るべ這里ゐ在り悄地ゐ仆候を遣して其勝敗を覘せーゐ和殿い既ゐ名ある敵一人を生拘り猶大敵を權ー退けく。後安く做さんとく反く隊兵のヨリたを欲せを銃術ゐ修煉せ雄兵二十名を那里ゐ在せく其他い從ふとを饒さを其隊の兵們のかへり來て事情も知れーぶいゐふまるや。と思ふのを我さへ遠く去難く。和殿の來ぬるを待く居りあるゐ那生口を知れる者あり。他い顯定主の家臣齋藤左兵衛佐高実の家子ゆく兵衛太郎盛実と與做を者人。衛の微子瑕ゐ異るゐ主君の寵淺くれば戰車の頭人たりとゆの。然らば是要ある者へ其の餘も思ふーあれば則田稅力助ゐ隊の兵三百名を從せく五十四田の陣所へ遣ーゐた。和殿の首尾い甚麼ぞや。と問へい現八然れべとゐ我固様々ゐ計ひく敵の胆を拉ぎーゐヨ勢を憑む烏合の弱兵一會投石ゐ駭ぎて衆鳥飛去ざる者あらば將も士卒も驚謀ぎて一個も迷ゐく逃亡ゐた迹ゐ棄くる戰車數十乘あり。皆うち摧ぎく且其馬を奪略らべ。後の戰ゐ利あるべけれど其頭の听為ゐ時を移ーて寄隊の返ーを來ぬるゐ逢ば其回ゐ防ぎ易くーと思ふくあく敢せを長阪橋を截流ーて寄隊の路を断ぎ。儘退ゐ出ぬと告れば杉倉直元ゐ頭人老兵側聞ーて胆を潰ーゐ面を注ーくさても。さてもとぞろゐ古を卷て感服を并ば中ゐ犬塚信乃い蹴然とーて却ゐ犬飼和殿の胆勇ハ今ゐ初ゆるぐ。約四萬の大敵ゐ身ハ只一騎隊の兵三十。一呼吸の間ゐーて言下ゐ大敵を威ー退けく。其勢を推量るゐ全身都て胆ゐあらぐ。何人ゐ能せんや。実ゐ我邦の張飛ゐる哉戍孝ば及ぶ听ゐあらを然ハ乍ら惜むべ。和殿の思慮足ざるゐ何とゐべ數十乘ゐ那車をうち摧くーを時をも

移さむ燧囊に持つらんと火を鎖ぎて車を焼く。大敵返しに来るとも煙に堰まとく躊躇ふ間に和殿の退口易からべし。敵に車あらば後戰に自家の利。亦只たのみのこるは橋を毀しに拙策と何とかせば那長阪川に小流ある寄隊四萬の大兵あり。其橋あらば做りぬとも或い樹を伐りてもく投渡し或い埋草或りく川を埋るとも。做し易からべし。然ると和殿憍に橋を毀れば心を知られて。実に寄隊と怕るる者と外に計策あらじと思ひん寄隊四萬の大衆中に一個の智者あらんや。那折橋と断流さるべし。其儘にて退ぬべし。寄隊必訝て。猶謀ありと思ひん。然らば漫に那橋をうち渡りて追逼るべしと。あの理を懐ひぬべしと憚る色なく論ぜれば直元以下の頭人老兵這宏論に敬服して。現知に大塚優れりと思ざる者なりけり既にして現八も憶ぬ信乃に鮮暁されて。脱落けりと悔て及ばず。什麼にかして可らんと問へば信乃答へらく。然ば

四萬の敵に怕るに足らず。只那戰車に怕るべし。あらねども今暴河をうち渡り城に竜りて他を防ぐ。寄隊戰車の奇巧なるも用ふる由なからべし。但恨る所に我が二人強くあの地に敵を待ぶ。甲斐なく城に逃げ竜らば獨我と和殿の恥のみ。御曹司初陣の花を散さむ是似なり。蟻に這義を思ふをもく。我既に主張あり。和殿も豫知れる如く。前所斫河の這方の岸に一座の新岡あり。これ今より十稔有餘前に氏暴河數度の洪水ありき。砂石を推上げ田甫の害に做りしが。土民力を勤せく。其沙石を鋤除くに愚公が山を移せし辛苦と數ふべ。約其三稔許にして沙石を一所に寄せ。一座の岡に做しが。這岡山高さ數十仞に上極めて平坦なれば數千人を住むべし。況や今い年を暦く。自生の嫡樹ヨヌくあり。是築ざる城郭に似たり。然ば我一軍蟻に件の岡に據りて。寄隊の戰車を防ぐべしあの故に方僅田税力助に隊の兵二百名を

従せく。五十四田へかへ遣せい。那里ふある戰栗兵器と文明の國ふ移させん為へ那漢萬の事ふ逸又蝕けれい今いも好時候るゝん卒々とおもはせば現八所ひ嘆唱あてあらぶべーと答ひ。隨即信乃武者助と共侶ふ各隊兵を推立せく。五十四田河原の上ある文明の國ふち登れば田税力助逸友い隊兵三百名と倶ふ先さちく這岡ふ在り。則信乃現八等と相迎へく。那生口盛実ゝ士卒十名許ふ吩咐ふ。哨く。國府臺の城ふ呈せーる。並ふ今日の閧戰の事の趣を注進せーよと告るふ信乃い其移させける戰栗の思ふも似ず減銷して僅ふ三百苞許ふると見て訝りく其故と問ふ逸友答て然ンい料ざりける禍事あり。陣所ある戰栗の失さりーを。ゆゑ生るふ道ふ行ければ訝りゆゑも理りえ。鄙高ふ土民等が潮ゝと听くふ近國ある野武士の頭領ふ高飛車和女九郎剣峯瘤四郎と喚做をあり。其徒一百七八十名と。わく。這回成氏主の隊ふ附きく欲ゑーふ疑るゝやありけん衆議らまゞ是を許さ

ぎ。然るを横堀在村計ひく。若们殊ある功とりく。倶ふ志を見さば必重く用ひられんと固様々々ふせよかーと。悄地ふ論ぶりーるば。和女九郎们皆義悦びく。當陣の隊と覘ふ程ふ今日ふも葛西の閧戰ふ當陣営と成る者の寡ふを覘ひ知りけん件の和女九郎瘤四郎ゝ首ゑ。其徒百七八十名と共侶ふ間道より推寄ゑり。且陣門を毀る破り我老兵を攻毀る散らーて。剰陣中ふ在る所の戰栗を奪略りく維措たる我船ふ打載々々暴河を泝り漕去りく。這地の荘客ゑ知りく百十數名援け来り我老兵们ふ力を勵せく。齋一船と乗り出て。赶蒐く戰ふ程ふ賊徒ハ竊く船毎ふ積入れ戰栗の殊ふヨヲくりけれが巨舫四五艘乗論ゑ。賊徒の溺死る者百幾名ある知らゞ。开が中ふ那高飛車和女九郎と剣峯瘤四郎ハ猶逃れる戰栗を攫んとく。船ふ乗後れて在り一程在下料ざかり来く事れ趣を知るとそゞ儘失場ふ隊兵を推找めて和女九郎と瘤四郎と其餘類さへ

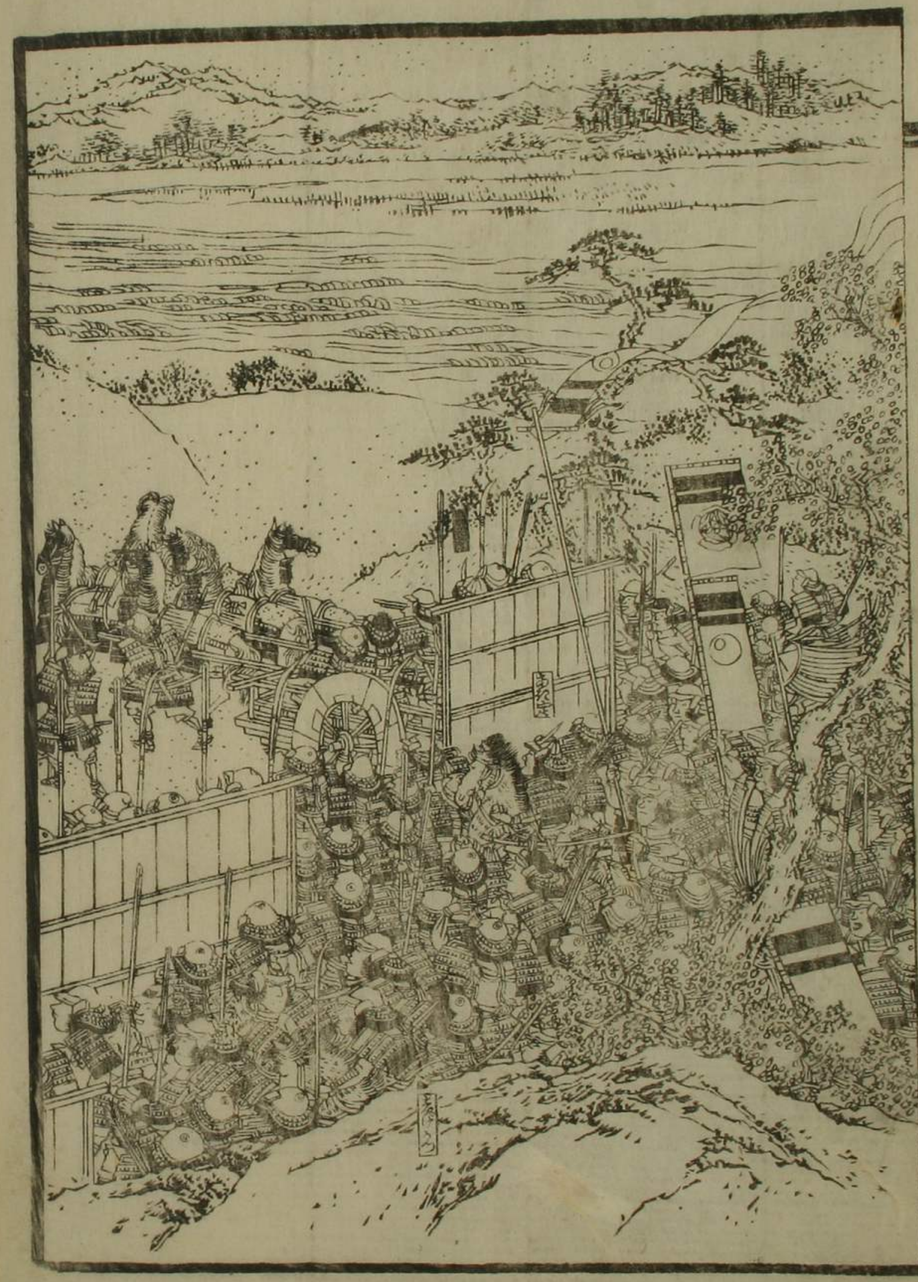
數を捕りしが禍鬼夙く鎮まらぬ然れども戰栗一千數百苞は皆是泰河の底に沈み
あるを亟に採揚ぐべくもあらず殘る所の二百七十五苞あり其七十五苞とは莊客們が忠
戰奇特の賞祿に充て遣しぬ且陣營に在りし老兵們の爲に痍を療ずるの
しく死に至りし者多きの故に戰栗の形の如く減銷して今の岡に運登さ
れし二百苞の外のものと一五一十を告知せば和女九郎と稲四郎の首と実檢に入れ
る痍負ざりける老兵們も其漏さるを補ひて陳謝の詞を聲しけり思ひ設
這一樂に信乃が驚たのへばゆゝし現八も眉をとち頻に兇徒を即時に擊殺
げに愉快の事なれども戰栗失く復らざるは是第一の憂なり速に船を乘浮
め水底を撈らせ咸引揚ぐべし後悔あらんとのへば直元も俱に計るに在
る所の士卒の五千有餘に二百苞の戰栗は僅に二日を支べし水底を
採揚に其事亟に做しかたく疾く臺の城へ告稟して戰栗を
ぬべしと議すると信乃は速に其兵の日に船を漕出させ水中を撈
るとも或は使を臺の城へ遣はして戰栗を乞るとも今宵の中に來せんや其事
なきを做しなる時大敵急に推寄せば何をもて是を防ん志士は溝壑に存るを
まぎ勇士は其元を喪ふを忘れず今何の暇あり沈々戰栗を合揚んや且
事に至るといへども自他の勝負は知られぬ既に生口盛実を臺の城へ口上せ
ふ幾程もなく事の不の字を恐々と告稟あり御曹司及東の翁に物を思せ
らんは忠臣勇士の本意にあらず先疾彷戰の備を做さを今の急務なるべけ
と道理を舒く說諭せば現八を首として直元逆友諸頭人們は俱に感激して
敢異議せず然らば准備をのそれぞれ諸隊に分ち狹間配りして圍る樹間々々
に幔幕を援豆して寄隊の総帥九郎は為に當下信乃又謀りそのやう
五十四田の河原に維だし我諸船と那儘あせば必敵に奪れん然るべしと這

岡の背なる水際に繋ぎも亦要害に船あれば戰難義に及ん時士卒皆うち
乘りて逃まく欲る心起らん古の勇將い船を沈め竈を毀ちて死戰を誓せし
例あり只是進むべきまく其退くに路なる士卒の心一致して奮ひ勇む百倍
せん。とまく存る所の船い咸前の岸に退け。因府臺の下に雜くべし。そ中に
快船一二艘とまる留めて這岡の背なる枯蘆の中に隱し惜ば臺の城へ事の
火急を告まるよ便宜をうん。あもいそぐべし。とまを現八諾ひて躬て士卒に
下知しん。准備送る成し果しぬ。その宵に筏を焼明して徐に寄隊を疎ふけり。
介程に寄隊の大將顕定成氏憲房い里見の防禦使犬飼現八が大勇大武の
謀に權れく。四萬の士卒立足もなく逃さ假名町を退けて直知り且恥く。
うち嗟くのみぞ。姑且て。顕定い更に行候を遣して現八が後の形勢を覘
せ。長阪川の上に敵退けく一人もあらず。只橋を截流して路を断るのみと。

ふ。顕定是をうち笑て原来現八奴に謀られう。他那橋を截流せい我大軍を怕
るのみ別に計策あるあらじ。蚤く樹を伐りて那小川に架渡しね明日未明より
五十四田に推寄せく今日の怨を復さんぞ兵毎いて。と下知されば成氏も憲房を
是に氣を沉く勇をあり。俱に士卒を將て先途の不覚を儆めけり。偖而寄隊を
其詰朝二將四萬の大兵をもく五十四田に臨く攻寄まるに敵い故の陣所にあるぞ。
文明の岡に篭れる及昨日高飛車和女九郎剣峯猫四郎が敵の陣営城
龍ひる那身い戰殺まれども敵の戰栗什ば七八ゐ偖々の故とまく暴河の水
底に沈とまとふもの。その時風く笑えば顕定馬上に堂とうち鳴ぬ。悅びて成
氏と憲房とまの義を告く且ふ。那犬塚信乃犬飼現八ぞい我二連車に懲
ぞされば高所に逃登れ遮莫戰栗減銷して什ば二三ゐ。とまへば幾ばくの
よく支ぬべ四五日を歴ば飢疲れく。自滅せんる疑ひる。況や船を奪れば。とて咸

文庫蔵

岡山の囲ふ顕定
戦車と連ねて
威を振ふ



退けくあるぎとゐへ他みぎうう路と断ふ我今駢馬三連車とりく岡の三方を囲
囲まへ遂ふ活路る為べし寄せよ漏さると士卒ふ下知して其攻口と定むるふ則
岡の正面ハ顕定みずから将として鹿島烈衣八九郎名の頭人雄兵ヨヌくあの隊ふ在り
右のくハ成氏ふて横堀在村新織素約及科草七郎望見一郎名近習外様の
従兵勘うくぎ左ハ則憲房ゆく白石重勝雖布五六郎名隊長る者ヨヌく
従ふ総軍通く四萬餘名百十數乗る三連車と一隊毎ふ先ふ備く推登せ
ずく欲されども岡高ければ車馬找ぎ倶ふ箙と敲ふ喊の聲と揚げ箭を飛し銃
砲と連放ちく息ども艱ぎ攻るめうう信乃現八る毫も噪ぎ無る幕ふ箭丸弦
受れば士卒ふ一個も傷損ふ敵又盾を被ふ連く攻登らく欲されば弓箭銃砲を
ゆく射く落し數を滅し或ハ大石を投下ちく窠粉ふ做も勘うれば寄隊ハ蒙
痍児其數を知ぎ矢場ふ命を殞ぎも多うう恁桃戰ふ程ふ冬の日又蝕く暮

日ぐ寄隊ハ此ー攻口と甘げられども猶稲麻竹葦の如く繞焉とて囲と解ろ
ぎ三所の陣営白晝の如く倶ふ篝火を焼續けて明ぐ又攻んと勢ひ撓ぎ振
然ぐ介程ふ大塚信乃犬飼現八ぐの宵直元逆友等の諸頭人を一緒取
へく信乃ぐ名ぐ今日の闘戰主客の勢ひを思ふ自家ハ小勢ぐれども高ふ虚り
ぎを防ぐふ利ぐ寄隊ハ大勢ぐれども低ふ在ぐの故ふ反く傷損多ぐる然ば
とく只一戰ぐく敵の弱るべくもぐ倘恁地ぐく日を過ぎば自家ハ必戰疲窠
美旅ぐ首陽の厳も甲非文く句践ぐ會稽昔の恥を雪るふ由る為べし因て熟思
惟るふ寄隊の専馮ふ所ハ只那戰車のみ蝕く是を破り除るふ何の日ぐ大敵ふ
克ふん為れども百十數乗る那車と一時ふ皆毀る破らん事ハ力ともく容易ふ做ぎべ
くもぐ於是再ひるふ初大阪ぐ獻りし八百八人の一業ハ只水戰の為のみ
ぎ這里ふも亦ぐ時ふ於く風火の資助と借るふ為ぐ連り建ぐヨヌる為ぐ戰車と

誰うよく一時に除んされども岡の上よりして蕉火をとを投下さいその間近ろ〻に車ふい火の穏らぎて反く敵に打滅されんあの美什麻と談されば大家ひとてく感佩あく。賢慮寔に其理あり。こむりあーて多ふ戦車を一時に咸焼くべきを段い我々いまご思ひ出ぎ教ぬと異口同様に膝を找めく請問へ信乃い然ぞと黙頭て諸君聞ぎ。昔唐山戦国の時燕齊両国の閉戦に齊の将田畢ら一夕火牛の計を設け大く敵に勝ける故事あり火牛い取外令牛の角毎に蕉火を結附て放ちて敵を驚ー其乱るゝと敵ーゝ又我大皇国ぎい源平両家の閉戦に木曽冠者義仲ら義旗を北国に揚げー時平家の方人齋明が赤火牛の謀を富樫太郎宗親と林六郎光明ら竜ー城を夜伐ー戦ひ利あーー事由い阿弥陀寺本平家物語巻の第十二に具ゝ又源平盛衰記長門本平家物語印本平家物語に載る所異同るれるを汎ぎれども。ちに参考せん要る。那齋明い素是加賀る白山の社僧ぎ。始い義仲に従ひーに又平家に降りて。這ゆあり其心術い表裏そ。ろうーかるに者ぎれども那謀い拙ーと思べらば然ば和漢に火牛をもそ効敵を破ーーに那田畢と這齋明あるのゝ我も亦其類軍に倣ふく火牛を放ちて戦車を破ん田税生い今宵事熟さる隊の兵十名許を従へく那枯蘆裏に隠ー措こに両箇の快船にうち乗りて臺の城に参上り東の翁に去の義を告ぐ。真間国府臺の近郊る荘客の家に在ぎ牛を多く召よせ牛と共に悄地に船に乗せ翌の宵這岡へ牽のそ来ぬ今宵いちゝ習の宵も我其時分を料り金鼓を鳴ーー大く寄隊と敵ぎ河原に餘念及ぎーて和殿の往復易るべ。とのゝ措を儚て今日い十二月六日ゝ新月い既に没ん羽立の宵も月い麦中に没ん潜ぶ為に烏夜ーそよけれ八日ゝ定正主水路を廃ぎ。洲崎に推渡らまくもと云風聲豫ねけまば寄隊い這里も行徳口も其日を契り期を推て必勝を急ぐ。ーん大川大田ら

多和倶ふ是這暴河の河岸ふ在りるぐ迷ふ見々る暇るけれど犬川と犬田ふ那里ふ徳あるべくもあらぬ今の急務い火牛の多のみ然べとく我方すの及ぶ所獨賢達て計るふあらぬ這義い既ふ犬飼と商量して右の如ー天も明ば甲非文るけんやとこくと言叮寧ふ説示ーんいそぐせば現八も倶ふらふ臺ふ近郊ふ求る牛の多ス少いまぐ知ども寧一頭も多ス好とも其も明日只一日ふあり企くとそ待べけれと心屬れば直元ち頭人老兵感佩して辭して持口へ退りけり偖而田税力助逸友いもの夜丑三の左側ふ隊兵十名を従へ々岡の下ふ枯蘆の裏ふ維ぶるける快船二艘ふ乗りて悄ふ國府臺の城ふ赴く程ふ信乃現八ふ士卒ふ下知して猛可ふ戰鼓をうち鳴らー喊の聲を風く目今急ふ攻下るぐ勢を示せーが寄隊ハ吐嗟と驚騒ぐて哀れ犬氏い戰栗竭け夜驅して落んとするぞや遣る免まる推包ぐ一人も漏さず擒ふ捕りねと相罵りて戰車を連ねて大力を援持ち鎗を挾て旗を推建箭を飛ー鉄砲を連發ちく透もあらせぬ構るふ敵い徒其勢のまゝ權且ー七音もせぬ原来那奴们出後れて迂闊の夜を俟るべー無益ふりぶと皆嘆くのと各其鉦を鮮て憩睡まく欲まるふ敵い又戰鼓をうち鳴らー喊の聲を吐と風く驚騒ぐ始の如ー寄隊い是ふ睡りも忘せぬ多ふ這夜を明ぜ他所を見々ふ暇あぐ故ふ田税逸友ふ船ふ乗り河を渡して國府臺の城ふ赴ー寄隊ふ知る者ふりぶ偖而その次の日も寄隊い又口三連車を岡の下ふ相連ねて攻るとのり敗ーぶを信乃現八ふ物ともせぬ敵の箭丸を暮ふ受々推登らんとする猛者あれば或いハ箭或い鉄砲或い石を投ける岸より是を撃る陸上ふ皆中らぬとの者ふけまぐその日も寄隊ふ傷痍児多くて終日挑戰ふのみ冬の日ふれば短くて又いぶ暮ふけり然べその宵も信乃現八ふ逸友ふかり多べぬ時分を料り士卒ふ下知そ又攻下るぐ勢を示せと昨宵の如く金鼓間るくうち鳴ーて寄隊を連ふ

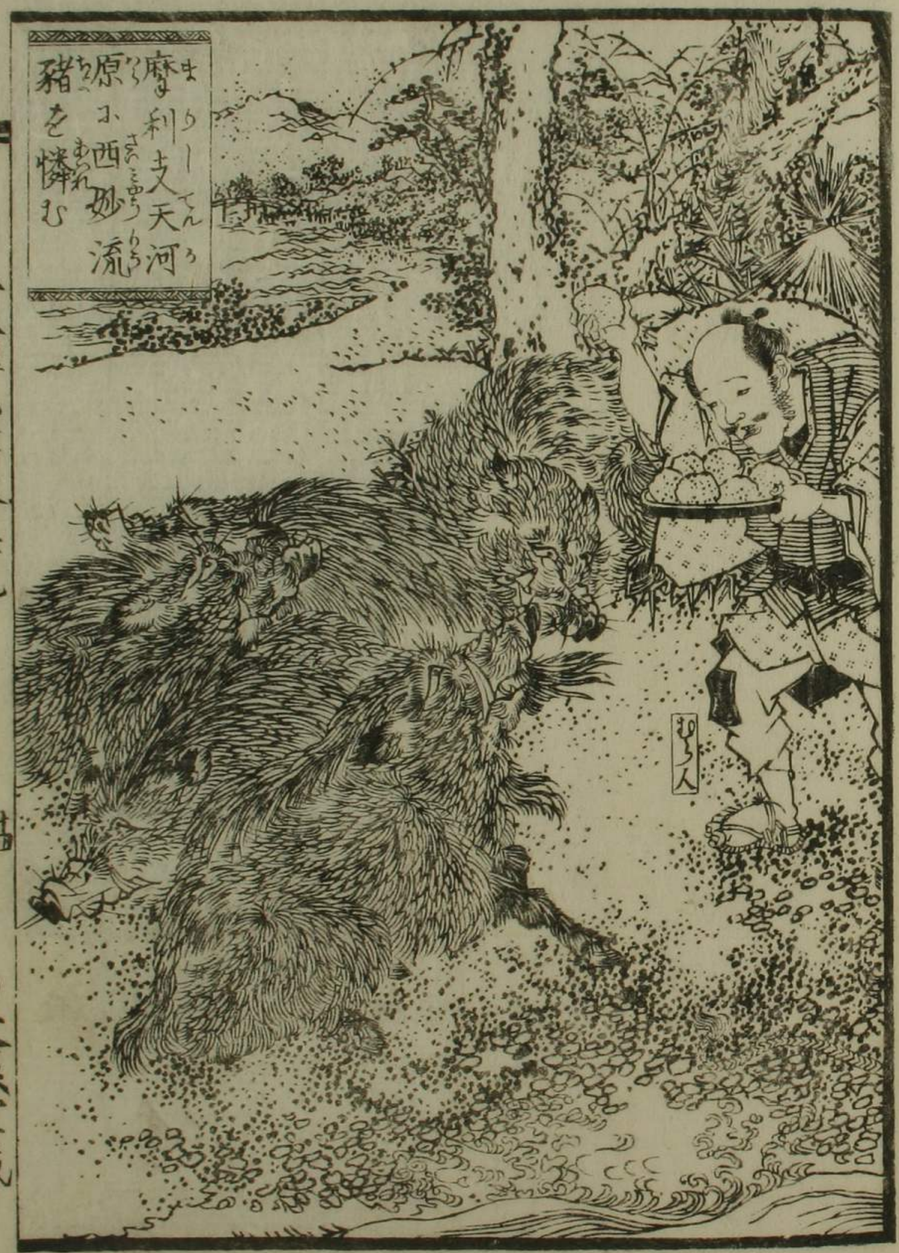
驚まゐ寄隊い都て先度ゐ懲りて敢近くゐ找まひども。然ばとも由断ぜず只攻口を守るのみ。河を渡り来て岡ゐ入る敵ありとも知ざりけり。小程ゐ田税力助逸友ゐ其の夜子二刻の比及ゐ國府臺ろかゐ来て。信乃現八ゐ報ると吟くゐ那身い昨夜障ることゆくゐ臺の城ゐ入ることゆく。隨即東六郎辰相ゐ急を告ゐ事を欲ゐ事情を。詳ゐ申ゐ上ーゐ那里ゐ鄙ゐ那現八が生口盛実をまわらせー折義通君感悦浅らぬ。有徳れば自家小勢とへども猶全勝のゆえあらんとそ最憑ーく思ひゐ寄隊い那巧微ぜる三連車とヨヲく先ゐ五十畠を臨く椎寄来ゐ備鋏石ゐ異ゐ紙ゐ二犬士の武勇ゐ。勢二ゐ中ゐ由ゐ。文明の岡山ゐ勢登りて其英氣を避ると云風聲ゐ。あまねゐ益叫鏡喧喊聲まで河を隔く夜と共く日と共く。ゐ合る如く吟まゐ。剰自家の戰栗い徳らの故ゐて。ヨヲく暴河の水底ゐ論ー事の幸を誰ゐとゆく知られーゐ義通君を首ゐ。宿老頭人士卒まで心安らゐ。躍て衆議を凝させて。夜ゐ紛れく岡の陣営ゐ戰栗をや入れさせん。然らぬ城内ゐ在る所の士卒を盡ー船を出ーて。御曹司ゐ倶ーたり二犬士を相資け。雌雄を一時ゐ決せ狭と云意見區々ゐ分ゐ。議を盡ゐ。議勇ゐ似れども。寄隊い四萬の大兵ゐく。是ゐ加るゐ那駢馬三連車の堅陣をゆく攻るゐあらぬや。虎ゐ翼を添る如く。勍敵と知りゐぐ。當城五六千の士卒をゆく河を渡ーて伐まぐせ毛を吹て疵を求る。悔ゐたことを。ゆざるべー。然ば羽音の夜甲夜過て。烏夜ゐ乗ーて戰栗を入れさせる。ゐあくとゐけん。幸ゐく岡の這方ゐる。水際ゐ敵の囲ゐー。是究竟の便宜と。意ゐ我八犬士ゐ各身を衛る霊玉ゐ。且伏姫神の冥助もゐんゐ縦窮阨の中ゐ在りとも。大勇敗ゐ。然ばとて河を隔く。長視て可惜日を過ぎ。轍鮒を枯魚の市ゐ訪ゐ。寛急の理ゐ暗き者ゐ先戰栗を入れさせる。頭人を撰むべーとく。則真間井樅二郎と継橋綿四郎ゐ課て。

翌の夜丑三の時候戰栗千苞と三三十箇の大平駝舫ふらち載く。雄兵約莫一千餘名急ふ暴河を横ぎり渡りて岡の陣営ふ届るべ〜と定めさせそのの日の無議ハ果ふけり。あくふ其夜岡山の陣営より田税力助逸友ゞ信乃現八の使ふ達て十個の従兵と俱ふ悄地ふ臺城ふ赴ふ則東辰相ふ就て信乃ゞ計畧と豆禀し且牛と求ると急ぎ訪れ辰相听て欣び感じて敢ふ他議ふ及ぶ逸友並ふ従兵們を労ふ件の衆議の趣と戰栗餽りの准備あるまでも詳ふ示談せ〜ぐを逸友則義通君ふ見参して禀ると始の如く牛と欲ふまるの外ふ敢他議多アらず義通君ハ事の危窮ふ一〜びいちち驚ぎ又信乃ゞ謀る所微妙なるを歎び感じて六郎義通那而ふ応ぜべ〜とそいそぐせ夜ハ辰相奉り退り出て次の日早天より駝く近郊ふ村正壯客ふ下知して其家毎ふ在る耕牛と今一日ふ駛集めく疾當城ふ牽のて参るべ〜必過分の重賞あるん倘慾く隠して早せざる者ハ其罪免るべからぬと最も緊く掟て催促連りたけれども下晡ふ至るまで牛一頭も牽のて来ぬ四境の村長故老們ハ連立て城ふ詣くおそるく禀ぶやう今朝疾仰付させ〜し耕牛のうへハ一村毎ふ徇示して隈なく募りひひ来ふ約莫這四下ふ壯客ハ田圃を鋤せ荷ふ東西と駝せ荷ふ皆馬なゞ用ひそうろう牛と使ふ者とそハ哀れ一人もふ無上總ハ牛ヨりくあれども路近くれば爭何ぞ今日の御用ふ達ぐ〜ふ。いりで饒させ〜ぐ〜と異口同様ふ陳ぶ〜ゞ辰相これを聞ぢ怒て開ふ安らぬ思ひると嗟沉ん局の内へ其村長故老們を召入れさせてみづから虚実汝質ー問ふ皆其禀を所始ふ違ぬ馬ハ黄金ふ牧あれども牛ハ他所ふ求め故ふ價直馬より廉くれば人皆欲せぬと陳謝の詞を聲まで佯誰ぞ〜ぬれば辰相いよ〜困ど果て計の出る所を知ぬ姑且ーて〜ぬ牛ふ亜く角あるゞ則鹿と羊ハ羊ハ皇國の獣ぞくれば這頭ふ在るべ〜倘遊樂ふ大鹿を家ふ畜ふ者ハ是な

たやと問へば大家あるじと答ふるを中ふ前砂河の邊なる村長ゆゑ夏次兵衛と喚
做す者膝を拍て喜ぶ。今尋ぬる鹿を飼ふ者とてあるとぞ。
へども老て最大なる野豬のよく人ふ狎るゝ我村ふヨヌくあり角へなけれど牙長くして
いろ〳〵べらむ。御用ふ達せんと欲と真実立告ぐ請問へば辰相訴り眉を顰めて并ふ
亦奇〻なるかな。鹿ハ京鎌倉の茶店ゆ興鳥と共ふ飼狎して人ふ觀るものとー
呼けども野豬ハ猛獸ゆ人ふ狎ゝ〻者ゆ原ふ開を畜ふ惜るい故ゆ其あらあ其美を告
よ。其ゆ麼ぞやと問復されて然こハ今茲十月の時候最大なる野豬六十餘頭皆
四足を結柱り一儘虚舟ふ載せられるゝ前砂の麻る利支天河原の岸へ流れ着
ハ皆四足を縛る者驚て怪て行殺せと罵るもあり十古々殺せと益々然ゆゆゆ助
けて陸ふ外一ゆ遂ふ田圃の害を做さん只突流せと宣もあり麻る利支天堂ゆ別
當る西妙と喚做す修驗者ハ特ふ慈善の本性なるゝ俱ふ河原ふ立出て其野

豬を相てのゆ衆人よく他を視よ。猛獸も恁做るとハ皆是涙啘ゆ人ふ救
ひを求るふ似るゝ各位ゆ知ぬや昨日安房より來ふける人の噂を聞ーふ
屬日安房ゆハ國守の山獵ありけるふ素ふ依る稀なる仁君ゆ御座ゆ其獲の
ヨヌくふも只生捉らるゝあるゝ敢一頭も殺ゆ中ゆ犬狼野
豬鹿なるゝ或人を害ふ者或田圃を暴を者ゆ皆筋ゆ載せ流し遣るゝ
なるゝ然ハ這野豬も亦是國守の流させゆ獵の獲であり狩是も亦知るべし先試ふ
一二頭なる疾這里ふ助け登ーて何まれ物を喫せゆ大家有理と悟りく壯佼毎三四名
躰て其船ゆ引き維ゆ留めて特ふ創ゝんとゆ三三頭岸ふ援上る四足の索を解く程ふ
西妙則宿所より來の握飯を食ふ躰て是を投與ふ短尾を揺り拜る像く喫ひ
つく妻母ゆも逃もせず四足を座て睡そ在り船るゝ是を見て美し鼻を鳴らして立ちくるを屢
る西妙ふよく憐て又衆人ふ向てのゆ既ふ這三三頭索を解ても逃もせず人を害る心なゝ痛く

義びをとめ


摩利支天河原の西妙流
猪を憐む
犬坂毛野

先度ふ微ぢらるゝ。然るとも那殘まるとも助ぎ守の御仁心ふ似るべくもるに不慈不善の人ことのまえ況やもつい名ふ負ふ麿も利支天神の社地ゑれば神の憐みあり。依こなあふ欲是も亦凡慮ふ量り知るべ。ふあるぎ人人ふ心せよと諭せば大家又諾るべ。究竟る壯佼十名許。或い其船ふ乘程り。或い水際ふ立ちゆあり。左右して其野豬を送もるく。岸ふ技登りて見るふ都て六十五頭あり。孰もその大ゑること犢ふ似るべく牙の長ゑい尺ふあり。短ゑも七八寸。八九寸ゑ。剛毛項ふ逆立て現怕るべ。猛獸ゑれども。其人を甚ふと。豚児の母ふ逢るゞ如し。恥て感其素を解捨て物を喫まるふ麥の冷飯のみて足るべくもあるべ。秦まれ合ゆ。来て與るふ喫ふと始めて並て悅服の心あり。又試ふ牽立て故来り舫ふ載せんとす。皆ゑ返巡りて従ふ。次の日山へ遣棄んとも牽まくまれど毫も動ぎ。原来麿利支天の惜まて使せゆるるんも。其ゞ儘ふ遂もせ。則村中類ふと云這一

奇事を言詳ふ。次兵衛ぢえ上りゑ辰相听て感嘆して肚裏ふ思ふ。我君の御仁心猛ゑ獸の上ふあも及せゆ盛德を仰ゑまれば。ゆゑ高ゑ昔唐山姬周の時。齊の宣王い牛ふ易るふ羊とのそせよとのゑ。升い只鐘ふ釁ゆん為のゑ是ゑ大敵の戰車を焼くべ。牛ふ代るふ野豬ゑとも其牙尺ふ麻ーとゆゑ今宵蕉火を結着るふ必や便宜るん。今不用意ゆて這物あるゑ我君仁義の御餘福ゆく且伏姬神の寞助もあるべ。何の疑ふところ。次兵衛ふ向ひて牛ふ代るる野豬い相応ーるゞ思へども大ゑるゑ犢ふ。ーくて牙長ゑゑ試ふ用ひるるもあらん。你い蚤く立かる西妙ふあの義を告て其野豬を皆まゆ。迅速せよとゆゑ。則雜兵一百名ふあるゑ。次兵衛と俱ふ前所村遣りて這他の村長故老ゆい身の暇を取せゞ。皆欺びて退出ふけり。然いあの時次の間ゆく件の奇談をゆる。田稅逸友ゑ欺びゆゑ義通君も辰相ゆゑ上ふ駭嘆

き。且感悅大さきらに。隨即加船の准備をいそがせり。其野豬の來ぬるを待ゆ既ふ
きてあの夜戌中の比及ふ件の百個の雜兵ちヨヲ次兵衛並ふ西妙と壯客ども従
へり。六十五頭の野豬を牽せて城ふかへり來る事恁々と語れば辰相則其野豬を
書院の庭ふ牽入さきく義通君ふ見せまるふ逆友及真間井継橋們の諸頭人を
侍坐して俱ふ是を觀るふ現ゆうるふ弥増く形大にく牙長く且其人ふ狎と呼と牛
馬ふ異なるべくもあらざれば義通君と首を大家奇へと稱へ。ひと憑ふ思ひ給ふ。
當下東辰相ハヨ次兵衛西妙們ふうち向ひて若們皆兼れ牛ふ代るふまの物ハ相
応しくふ思召せども倘用ひらるゝよりあれて其功あらば恩賞ハ必異日の御沙汰ふ
依ん罷り立ひといそぎ大家歎び言兼しふうち連立ちて退りけり。恁而義通君る
奥ふ退きて辰相と召て仰ふる筥ゆ辰相則兼り是を逆友ふ偽へて公ふ今宵大
塚ゞ計る所那野豬を物足るべきや。否ゆ知るよりあれば。御曹司尚御配

慮あり。真間井継二郎と継橋綿四郎を加勢の頭人として。雄兵一千五百を授け。
目今野豬と載遣さへ。悄船ふ推續いて。戰栗約一千苞と岡の陣営ふ入
れさせむや。ある御曹司の賢慮人あの義什麼と談されい逆友答て。然ハ其義ハ
信乃ゞ遠慮あり。然ゆ御諚もあるまゝ辭ひまれとのれ故いかゝとあらば今の急務ハ
寄隊の戰車と焼果さまく欲まるゆゑ其火攻の計ゆられて鬪戰勝ば求ぞ。敵の
貯る戰栗ハ必我有ふまん然ゆと今愁ふ加勢の士卒を遣されて且戰栗を入
れさせゆゑ潛ぶとされど敵ふ知れて反く火攻の謀ハ空ふゆりゆゑ然ば加勢の兵を
亦戰栗と遣さるも目今ハ尚早ゆ。先疾野豬と賜りて退りそ信乃ゞ火攻の謀
成るまゝば煙天ふ冲るべし。御曹司ハ开と暗歸ゆて士卒と従へ御船と我ゆ文明の
岡ふ御旗と建て自家の軍威と賁けゆゑ犬士ハゆゑ士卒の勢ひ必や十倍せ全
勝疑ひなるべし。此ハ是豫ゆ信乃ゞ庶幾ふ所と今愚意をゆく稟まふあらぬ御

許容あらば幸ひなんと請ふを辰相うち听く。其議の都てあるべし。然らば真間井縦二郎秋季と継橋綿四郎喬梁ふ雄兵一百名を相授けて。船中和殿の帮助ふせん。然るときは御曹司の賢慮も違ひまじ。又大塚が意見ふも稱ふて両全穏當なりんとのふ逸友重て異議せず。隨即辰相と共侶ふ又義通君の身邊ふ造て。事恁々と申え上て退る。秋季喬梁ふ一合する其言訖て自他百十名の従兵ふ野猪六十五頭を牽せ。悄地ふ城を出水際ふ立て准備の快船三四艘ふ其野猪を載せ人も皆うち乗りて漕せて前面の岸ふ届るふ今宵も信乃が時分を量りて。連りふ敵をうち驚まる最中ふてあるければ寄隊の都て立噪ぎて外を見ふべくもあらず。あやとめく逸友ふ船も人もヨヌくるーふ素より津近ければ時を移さず首尾を辺く。看外る者ふ乗らず。恁而田税逸友ふ尚秋季喬梁と其従兵と野猪をそゞ儘一雲時船ふ在せて。十個の隊の兵をのを従へて悄地ふ岡の陣営ふかゝる則信乃

現ハふ前條の虎崖略を箇様々々と告知るふ言約ふて友て漏さず。初ハ牛の汐ざくーの後ふ野猪の奇事あり。六十五頭を辺とるの且義通君の賢慮を真間井継橋両頭人ふ隊の兵一百名を従せて野猪を牽せ来りぬ。事の首尾を報知るふ現ハ武者助ぶ秋びらべるもあらず。側聞せるる古内倶教二頭人先兵推並て。奇也々々と稱賛を當下信乃ハ忻然と逸友ふ向ひて。宣疑ふ物ふ奇偶あるハ今ふ初めぬるぶる牛を求て牛を約を反て思ひ付もる。野猪の老なるをヨヌく沁ぬるハ是も亦。人力人智の勢力をもて致せ。又其野猪を牽て留めて社地ふ番措ける。麻呂利支天の別當西妙と那加賀の白山の社僧齋明と字ハ異なれども唱ハ似くるハも亦因果自然ふ生て。今古約束あるが如ー名誉白性とのひらべー。是ぶるもふ我両館仁義の御跡徳我伏姫神の冥助ぶるぞ。這妙用ふ至んや。とのひらく側を見ふれば現ハ然へと點頭て卒とむるふ共侶ふ塵埃

あり。相並びて。洲崎のくさと富山の方ふうち向ひ遥拜して。其恩德を謝したまふ。默禱
祷訖りて。信乃は又逸友を労ひて。我急策を意外なる。火牛ふ易るふ火猪とをして
せる。あの爰い和殿の功なるふ。もゝ肉ふして時を移さず。天い明て空あやまるむ。先野猪と
讓送の頭人真間井継橋隊の兵まで。疾喚集めて。准備とせまやとらふ逸友
あるるゝ。岡を下りて水際ふ至りて。秋季まと喬沼ふよりと告て。共侶ふ其隊兵ふ
野猪を。牽せてかへるあふげるとは。信乃現八ふ。秋季と喬沼ふ。今宵の加役を勞
ふて。俱ふ其野猪を見ふ。実ふ六十五頭あり。且字ーあり。弥増て。形大にして牙長
くして。人ふさへ狎れて。敵を敗るふ。究竟の奇物。あの上やあらべと。思ふ二犬士の歎
びあるゝ。直元ふ古内俱教二们。暇あらば老兵まで。咸無ふ下ふ取水ひまそ
あるとを。觀る者。駭嘆して。神所ふ多ふ。と稱賛を當下。現八ふ。約角あ
ふ獸のよく人ふ。觸てよく力あるふ。則牛と羊ふ。鹿い其角牛より長くて。其

角ふ技あるとふ。我薫火を結着る。曾取宜。ふ似ふ。とも。其性痛く人ふ怕
まる。物ふ觸ふ。の男ふければ。開と敵陣ふ放つとも。必逃て。度を失ふ。何をあてよく
戰車と。燒んと。あらふふ野猪い角ふけれども。牙長ければ。角ふ代べ。況や其勇あって。痛を
負ふとは。奮男十倍。敵ふと。擇まで。駈まくまると。猟夫も制しかーとまあをのく
匹夫の勇士と。野猪武者とふ。言ふ。言を思ふ。那と思へ。今宵の所要牛ふも勝
まり。宜ふ珍重々々と。褒れば。大家然んと。答ふ信乃も。ひつく。點頭くのを。合ふ。
復して。聳児と。放ちて。端然と。衆野猪ふ向ひていふ。如是妄田生。今猜まるふ。安
房ふ。あーー。猟競の。甘獲ふ。せが。我君の。御仁慈をして。流さまあーー。其舫ふの地漂
ひ来て。又西妙们ふ。慈悲ふて。死ざるのとふ。我閨戰の。幇助ふまるれば。今敵
陣ふ放つふ。及びて。或い寄隊ふ。搏殺され。或い。俱ふ火ふ。燒れて。命と。其里ふ。須
らん。遮莫仁君ふ。殺の。報恩。其軍功い。勇士ふ。勝まて。永く。竹帛ふ。載られん。勉めよ

かゝと説諭せば野猪は孰も安知るごとく目を抗て見ゝ黙頭ゝ似くゝ安らく欲ゝ[illegible]
ゝ然らば隊部を做さんとて且現八ゝ向ひて公方大飼和殿い思ぢや寄隊い囲こと
岡のこ面ゝ在り其正面ハ顕定主ゝて左右ゝ滸我殿成氏と憲房主ゝ中ゝ滸
我殿いいでゝ和殿の舊君又我ゝ大父大塚匠作の主従助ゝ御座ゝ滸ゝ
今い舘の仇ゝとも那隊ゝ向ひく戰功と見さんい本意ゝあらぐゝの芙什麻と談ゝ
現八ゝ合て寔小也和殿い防禦の正使ゝ山内の隊ゝ向ひゝ我ゝ其子の隊と敗
らん村倉生と田税ゝ滸我殿の隊と任ゝ迭ゝ後易ゝ[illegible]と解れて信乃い再議ゝ
及ぶ又潤就鳥ゝ古内と振照俱教二と急ゝ身邊へ召て公方ゝ和殿ゝ俱ゝ五百の
士卒と領て權且這陣営と成るべ我火攻の謀紛れて煙天ゝ冲りゝ御曹司も出
陣ましくて當所ゝ御旗と建ゆんゝ折かの隊ゝ従ひまゝて後の進退ハ東の公羽の
指揮ゝ依りゝと詞いそく宣示も其言訖りて左右ゝ秋季喬梁と打へゝ和

殿ゝ御曹司の御意と稟ゝ一云野猪と讓逆の頭人ゝ誰ゝ隊ゝ[illegible]
従ゝ俱ゝ軍忠と見ゝ秋季喬梁ハ相欽ひて防禦使達の隊ゝ屠蘇玉
へと請ゝ當下信乃ハ雑兵をゝく鑣奴を召て公方ゝ我ゝ安房ゝ牽せる大江親
兵衛ゝ愛馬青海波ゝ飽ゝ[illegible]ゝ秣を飼ゝ義蟻くゝ牽ゝ[illegible]ゝ立ゝ這
ゝ又現八ゝ向ひて公方ゝ和殿も豫知れるごく那青海波ハ光舘の曩ゝ親兵衛ゝ賜る
東國一の駿足ゝ[illegible]ゝ大江親兵衛ゝ秋使ゝ立られて遥ゝ京ゝ赴ゝ今ゝ
至るまで歸らゝ[illegible]這回の大事ゝ逢ざれいさゝ朽惜かり[illegible]切て他ゝ馬ゝも這戰
場ゝ伴ゝ本意ゝ充んと思ひ[illegible]ゝ往る日稲村を出陣の折厩ゝ骨ゝ六の芙を
告ゝ牽せゝ茲ゝ在り又只這意味ゝ親兵衛ゝ親るゝ義士山林
房八ゝ身と殺て仁を做ゝ我ゝ再生の恩人ゝ然ゝ六稔前ハ夏行德る古那
屋ゝ他ゝ將ゝ死せんとせ時我恁々と拯ひ義ゝ[illegible]ゝ房八ゝ鮮血ゝ染る

夏衣に我その折より藏め惜て年来艱苦の中ゆゑも敢喪ざりけるを料らぬ今一番の役あり不肖の我身防禦使の大任を稟まりて這地の敵ゆゑも對へいなの折をもて他ゆゑ義名をいろぐ世ゆ顯して命の親ゆゑ洪恩の其萬一ゆ報んと思ふ志ゆ准備ゆ他ゆゑ深血の夏衣を縫ゆ縫せそゆゑ在り縫を則母の衣親ゆゑ舊恩ゆゑ背ゆ草て敵ゆ中らゆ身ハ一箇ゆて名ハ両箇且親任衛の馬ゆ乗らゆ則二役ゆ兼帶の任重けれども已べからば義の仗る所あれば仆るゆ隔昨の鬪戰ハ只是敵の強弱を試んと思ひしのみなれば晴の軍陣ならば那日ハ大江の馬ゆ乗らゆ赤山林の深血の縫を攜ずして在りけゆ時ゆゑ哉今日の鬪戰ハ両家の雌雄ゆ存り我計畧ゆて寄隊の三將を虜ゆせ狡然ゆ拙策を齬ひく敵ゆ首を捕らゆ狡両箇ゆ一箇の大殺ゆゑ那馬ゆ跨ゆ這縫を攜て寄隊を敗らまく欲ゆ那見ゆと意衷を示ゆ前より雜兵ゆ持せる縫を取出ゆ開けば現ハを守毎ゆ感嘆せゆとゆ

とゆく直元逸友ゆの諸頭人と共伯ゆ舟火の光ゆ就く先其縫を熟視るゆ現かの折より記ある信乃が病中ゆ被る夏衣ゆく房ハが血の深色ゆ其色六稔の今ゆ至りて毫も変らぬりけるを則縫ゆ做ゆ猶晴を定めてよく見れば縫の中央ゆ大書ゆく里見八大士隨一人犬江親兵衛金碗宿祢仁先人義士山林房八之紀とゆ二十八言を四行ゆ誌ゆたる用心正首ゆりければ直元逸友秋本寸喬梁ゆ古内俱教二ゆ至るまゆ當時の情由を云云と知ゆも知らゆも推並ゆく感ゆ思ゆ者ゆゑ就中現ハを蹶然として信乃ゆ向ゆて那行德ゆ旅宿の折和殿と俱ゆ艱苦を嘗ゆ時ハ我と天田と只ハ是のみ然ゆ山林ゆ義俠の死を悼む六稔の久しきも只ハ是一日の如くなれども報恩正ゆ時を待ゆけゆ和殿の忠信至まり盡せり我を及ゆ及ゆ及ゆと只ハ顧ゆ者ゆ已ゆ折ゆ又那両個の鐵奴を俱ゆ求まゆて面色ゆく來ゆく跪居ゆかるゆく信乃ゆ向

ひく告のやう剛才仰付らまして那青海波を牽めく来んとく十數糸荒屋ふ造ひ〜ふ那馬其頭ふ在ざるべうち驚汝く詐りく四下ふヨヲく憩ひ居る雑兵ふ問ひひ〜ふ大家知ぎと答ふのこ其往方詳るらぎ然りとく閣べ死るのこねぎ陣中隈なく求獵ひ〜ふ其影もるく迹もあらぎ意ふふ那馬絆を外〜く脱て敵陣ふ走り入り〜狡然らぎい自家ふ盗児ひく轉〜て他郷の人ふ售り〜狡獪ひ〜ても我们ぎ罪免れぐくふへども這斬もるく塀もるに露陣ふ在らく寄隊と防ぐ生死の境ふれへば自然ふ守衛の屈ぎり〜といくぐ饒さぬ〜と異口同調ふうち勸解るを側ぎ甘る現〜ぎる自餘の頭人老兵ぎさそもさても〜とだろふ呆れく口を鉗く在り況や信乃い驚ぎを智ふ理めく愀然と現八を見るのく大飼和殿いふふ〜ふ我慈ふ親兵衛とかのふの故ふ青海波を這陣中ふ牽せ来ぎれかは憂苦いるらんふと悔く及ぎ火急の攻口今い天明ふ程もるく〜先我馬ふうち跨く敵ふ逆ふく戰ひ勝ぐ異日又青海波の往方を穿鑿るく郷ひ〜ん各既ふ戰飯い飽まで腹ふ充〜ちても猶腰餉を忘るべ〜ぐ真間井継橋両頭人い疾従兵ふ吩咐く這野豬の牙毎ふ皆蕉火を附さぎ其餘の准備隊配い固様々々と宣示せぐ現八ぎの戈を好と答へく敢ふヨヲ辯せぎ各目今定めるる攻口へとく〜うち向ふ中央い犬塚信乃副将ぎ真間井秋季ひく従ふ雄兵千五百餘名野豬二十五頭を牽せぐ左右の二隊々犬飼現八副将い継橋喬梁乂其一隊い杉倉直元と田税逸友を両将とを二隊の雄兵三千餘名を分ちて一千五百を従ふ野豬い二十頭々皆蕉火を牙ふ附ぐ〜ぐ又岡就鳥ふ古内振照俱教二百五百個の士卒と俱ふ這岡山の陣営ふあり俱ふ喊聲を颺げ戰鼓どうち鳴〜して自家の軍威を帮助け〜有恁り〜程ふ信乃が鏢奴ぎい青海波の名馬を喪ひ〜ふ幸ひく其誅嚴〜ぐ罪免れ〜を歎びく。

火猪の大功
信乃現八雙ぐ
寄隊を破る

代るゝ信乃ゞ跨座る。連錢葦毛の駿馬ゝ雲珠鞍置て牽ゝそ来れば信乃い
負ふ〻る服の前ゝ漆血の縋をうち掛〻。重藤の弓と握持く現八直元逸友秋
季喬深们と共侶ゝ各馬ゝうち跨りける。約莫這両防禦使四頭人の鎧の紙
絲太刀器械。釬脛衣ゝ至るまで。打扮前日ゝ弥増せるを細ゝ名状もべらぬ徒而
二大士両隊長ハ三面ゝ立つゝれ。各一千五百の兵を前後左右ゝ従へく。炬を附る野
豬と各真先ゝ牽せゝ。まゞ明やゝ残星影寒く樹間々々ゝ張亘へる。幔幕一
度ゝ斫落させく。岡の下る敵陣へ勇ゝ火豬の數を盡して放ち遣
る。勢ひ脱免ゝ異ゝ人畜一様せるごく。野豬い數萬の寄隊と怕れぎ防備
へ戰車の下へ潜り入る。赤走り知る程ゝ牙ゝ附くる蒺火ハ又蚯蚓く戰車ゝ燃移り
先陣忽地煽々くる。その日の勝負甚麼ぞや。開い下の回ゝ解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯巻之三十九終